52

竹川竹斎と軽粉雑記

西井易穂
人・健康・医の研究所

竹川竹斎（政胖）は文化六年五月に生まれ、七〇有余年生き抜き、明治一五年一一月に没しました。伊勢射和村出身の学者商人で、弟、竹口信義とともに、勝海舟に経済的支援を行い、ペリ来航時、護国論を著して、海舟を通し、日本の国防のあり方に大きな影響を与えた人物です。射和文庫なる私設の公開図書館を創設、万巻の書を集め、広く庶民の閲覧に供し、庶民の教育に貢献した功績は計り知れないものがあります。

私は平成一六年一一月一日竹川邸を尋ね、射和文庫蔵書の軽粉雑記という記録を見る機会を得ました。この記録はいまだ公的な場で紹介されていないものです。敗軍の将、勝海舟に興味を持ち竹斎の存在を知ることになり、射和村の日本文化史上における重要性を認識しました。勢和村、射和村の水銀と梅毒について、調査を開始した時にこの史料に遭遇いたしました。

勢和村からはオランダ語を公的に翻訳した最初の人、野呂玄丈が出ていますが、射和村から竹斎が育ち、この地方は高度で独自な文化並びに豪商を生み出しました。勢和村は良質の辰砂が大量に産出して奈良の大仏鋳造にアマルガムとして使用されたことが、「続日本記」に記載されています。室町期に勢和村の辰砂は勢和村を流れる櫛田川下流の射和村で加工され伊勢白粉すなわち軽粉として、伊勢商人、御師により全国に広まりました。江戸初期辰砂の産出量が減産し、鉛を主成分とする外来性の白粉に押され衰退期を迎えますが、水銀が梅毒に有効という情報が入り、その水銀産業は一時期持ち直しました。

しかし、チュンベルグがもたらしたスイーテン水が吉雄耕牛、杉田玄白ら蘭学者により、汎用されるにいたりました。

明治になり医制七六条が制定、日本の近代医療が本格的にスタートを切ると、従来からの民間療法、漢方の排斥が起こり、射和村の軽粉を駆梅剤として申請し

たのですが、許可されませんでした。軽粉雑記に「此度元軽粉製造家第一コロール製出御免許鑑札并許不許御示令書下リシニ…」という文章があり、拒絶理由として五か条あったことが、読み取れます。

射和村の代表者達が竹斎に相談を持ちかけ、その課題を解決したいきさつと考え方が軽粉雑記という史料に詳細に記録されることになりました。

そこには駆梅剤としての軽粉に対する竹斎の考え方と思い入れが詳細に記載されています。行政の、効果は認めるが、その毒性が著しいこと、製造場所の違いで品質に差があるとの指摘に対して、反論していることの概略を紹介します。

外国人と日本人の化学物質に対する感受性の違い、化学分析結果から軽粉が甘汞で、昇汞より安全であることの違いを論じています。射和村の製造者に実害はなく、皆長生きをしていることを実名で紹介し反論しています。

それは製法の違いによるものであり、用いている竈の釜土が射和村の朱中山という土地で取れる赤土でなければ意味がなくその赤土を用いる時、初めて高品質の甘汞が結晶し、釜の外部に蒸散することが無いことによると主張しています。

射和村の軽粉は西洋の昇汞による駆梅剤に先立つこと数百年前の明和安永の頃であることを主張し、西洋の第一コロールより安全で西洋の言葉を使用することへの疑問を述べています。むしろ、日本独自の安全なくすりとして射和村の軽粉を輸出する方策を、富国策として取り上げることを強く進言しています。

この文章は竹斎が七〇歳過ぎの晩年に書いたもので、射和村の軽粉が許可されないことに対する憤りをこの雑記にぶつけたことが、読む者に強く伝わって来ます。彼が日本の近代化に果たした役割が奏功したと推測されますが、結果として、明治一二年内務省は試験の結果、射和軽粉の製造、販売を許可し、昭和の初期まで、製造されていたという記録が残っています。